

まだ、“かな”も覚えられないのに、漢字など教えて、子供に覚えられるだろうか。

この質問は、よくお母さん方から聞く質問です。幼児には、かながやさしく、漢字はむずかしい、という先入観がありますので、「かなも覚えられないのに、漢字など教えられて、子供が困りはしないか」と思うわけです。

ところが、かなは、普通児で必ず覚えられるという時期は六歳です。知能の遅れた子供は、六歳でもなかなか覚えられません。幼稚園で、かなを教えないほうがよい、と言われていたものには、大部分の子供にはかなが学習できるのですが、ごく一部に、学習に耐えられない子供がいる、という事実があるからです。

従来、かなはやさしい文字だと思われていますが、かなは、抽象的な音声文字で、幼児には関心のもちにくい文字なのです。具体的な内容をもつ漢字、とりわけ、幼児が関心をもっている実在物を直接に表わす漢字は、三歳になれば容易に覚えられます。

私は長年にわたって実験いたしました。この間に扱った子供の

中で最も知能の劣ったYという子供の例を紹介しましょう。

この子供は、幼稚園で一年間教育を受けて就学したのですが、就学時にかなは一文字も読めませんでした。かなで書かれた自分の名前は、ちゃんと読むのですが、その中の一字を取り出して読ませてもらいますと、もう読めません。

一学期間の学習を終わっても、ついに一文字のかなも読めるようになりませんでした。

ところが、漢字は、28字読めるようになっていました。当時、一年生の漢字学習の目標は、一年間に“30字が読める”でした。だから、漢字についてだけ言いますと、一年間の目標を、ほぼ一学期間で達したわけです。

しかも、興味ある事実は、「森」「畑」「雨」「雲」「雪」「雷」というような、いわゆる“むずかしい漢字”は実に簡単に覚えて、しかも確実に読めるようになったのですが、数字は、「一」「二」「三」のような、最も“やさしい漢字”と見られているものが、学習に多くの時間を費やしたにもかかわらず、ついに一学期中には読めるようにならなかった、という事実です。

つまり、知能の遅れた子供には、具体的な内容のある漢字でなければ、関心をもつことができず、関心をもてない漢字は覚えられないということです。

石井方式で、幼児に漢字を教えるのは、漢字なら覚えられるからです。どんなに知能の遅れた子供でも、「鳩」「犬」というような興味ある実在を表わした漢字なら、三歳になれば必ず覚えられます。だから、幼児に漢字学習をさせるのであって、むずかしい学習を無理に押しつけるではありません。